The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 「自ら」の2つの強意用法とその形式的・意味的特徴について |
| Author(s) | 小薬, 哲哉 |
| Citation | 言語文化共同研究プロジェクト. 2020, 2019, p. 21-30 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/76977 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 「自ら」の 2 つの強意用法とその形式的・意味的特徴について*

小薬　哲哉

## 1. 序

本稿では、日本語における再帰代名詞の強意用法を考察し、その意味機能の差異を明らかにすることを目的とする。小薬 (2018)、Kogusuri (2019a) において、日本語再帰代名詞「自分」が強意的機能をもつ副詞として用いられる用法を記述的に考察しており、また Kogusuri (2019b) においてはそうした副詞的用法への派生に関して、「再帰代名詞＋助詞」と「再帰代名詞＋再帰代名詞接尾辞」および「再帰代名詞＋焦点化詞（focus particle、とりたて詞）」の 3 つのパターンが存在することが示された。

(1) a.　太郎は、自分 {から / で} 発言した。　[再帰代名詞 + 助詞]
　　b.　次郎は、自分自身、花子をきれいだと思った。　[再帰代名詞 + 接尾辞]
　　c.　三郎は、自分だけケーキを食べた。　[再帰代名詞 + 焦点化詞]

(1) では、「自分から」「自分自身」「自分だけ」といった「自分」に何らかの要素が後続する表現が、述語を修飾する副詞的要素として機能している。

本稿では、いずれのパターンにも当てはまらない「自ら」の強意用法を考察する。「自ら」は、「身（み）つ柄（から）」という名詞句から転じた用法とされる。現代日本語においても名詞用法もある (2) が、名詞を後置修飾したり (3a)、副詞的に使われたり (3b) もする。

(2) a.　彼は自らを責めた。　b.　彼女は自らの力で勝った。
(3) a.　彼自らが過ちを認めた。　b.　彼女は自ら命を絶った。

「自ら」は形式的に単一の再帰代名詞から構成される点で、(1) のいずれとも異なる語構造を持っており、他の再帰表現との間にどのような違いがあるのかという疑問が生じる。

本稿では、「自ら」の諸用法について、作例および『現代日本語書き言葉均衡コーパス (Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese, BCCWJ)』（以下 BCCWJ）や Web からの実例を考察し、その形式的・意味的特徴を記述する。

## 2. 考察

先行研究において、非項 (non-argument) として生じる再帰代名詞には名詞修飾 (adnominal) 用法と副詞的用法の 2 つが存在し、両者は共通して「強意詞 (intensifier)」として機能することが指摘されてきた。また、これら 2 つの用法は、多くの言語の再帰代名詞に見られる特徴であり、類型論的研究が行われてきた。本稿では、非項としての「自ら」の用

* 本稿は、科学研究費助成事業（若手研究（B））（17K13446）による研究成果の一部である。

法を形態統語論的観点から同様に 2 つに分類し、形式的・意味的特徴を詳細を考察する。

### 2.1. 形式的特徴—形態統語論的振舞い

(3) のように、非項位置に生起する「自ら」には、名詞後接位置に接尾辞として生起する場合と動詞句を修飾する副詞として使われる場合がある。BCCWJ における「自ら」の用例数を考察したトルヒナ (2015) によると、その再帰代名詞用法は、全用例中 51% (5,384 例) を占め、次いで副詞的用法が 40% (4,234 例)、そして名詞修飾用法（トルヒナ (2015) では「体言後接用法」と呼ぶ用法）が 9% (934 例) と続く。この観察から、「自ら」の強意用法において、副詞的用法が頻度的に大きな位置を占めていることが分かる。

以下ではまず、名詞修飾用法の形式的特徴を考察しよう。まず、名詞修飾用法の「自ら」は、ガ・ヲ・ニといったいわゆる構造格を表す格助詞が後続するが、デ・カラ・へといった他の助詞（いわゆる意味格を表す助詞）とは相性が悪く、たとえ主語を表したとしてもこうした格助詞は容認されない。

(4) a. 大統領自らが演説した。
天皇みずからを初め（中略）みなすぐ京都へ向った。[1]
我空ならば相手に争う対象は無く、その対立心は空転し彼自らに返り…[2]
b. ?? 所轄の警官たち自らで、事件をもみ消すことに決めた。
* 太郎自らから、その話を切り出した。
* 佳子はそのアイドル自らへ手紙を出した。

後続する助詞に関する以上の観察は、BCCWJ での分布からも裏付けられる。[3]

| 助詞 | ガ | ノ | ヲ | ニ | ニヨル | デ | ト | ハ | モ | 無格 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 用例数 | 409 | 132 | 6 | 16 | 9 | 1 | 2 | 14 | 22 | 323 | 934 |
| % | 44 | 14.2 | 0.6 | 1.7 | 1 | 0.1 | 0.2 | 1.5 | 2.4 | 34.6 | 100 |

**表 1. 名詞修飾用法の「自ら」に後続する格助詞**

表 1 が示すように、「自ら」に後続する格助詞のうち多数を占めるのがガ格・ノ格であり、ヲ格、ニ格は可能ではあるが少数にとどまっている。また、格助詞の生起しない無格も 318 例（全体の 34.2%）と多数生起している。これらの特徴は、2.2 節で後述する「自ら」の意味的特徴と関係している。

名詞修飾用法のもう一つの形式的特徴として、「自ら」に先行する要素は「句」としての

[1] BCCWJ LBo2_00063。
[2] https://www.hakushinkan.jp/main/pages/enwa.html (2020 年 4 月 26 日採取)。
[3] トルヒナ (2015) でも、BCCWJ における「自ら」の名詞修飾用法について、用例数に若干の差異があるものの、本稿同様の観察を行っている。

構造をもつことが指摘できる。その内部構造には等位接続や複数標識の介在を許す (5) が、一方で焦点化辞や同格となる数量詞、意味的に修飾関係にない主要部名詞といった要素が介在することは許されない (6)。

(5) a. [[NP 本家の当主] 自ら]が、よく視察に訪れた。
b. [[NP 大統領または首相] 自ら]が、陣頭指揮をとるだろう。
c. [[NP 先生たち] 自ら] が率先して声を上げた。
(6) a. * [[[大統領]も] 自ら]が、演説した。
b. * [[主役] 2 人] 自ら]がゲストを楽しませようと、演出に工夫をこらした。
c. * [[大統領の] 演説] 自ら] は読みにくい。

(5) と (6) の容認性の差は、「自ら」およびそれが修飾関係を結ぶ主要部名詞句との構造的関係の違いに求めることができる。すなわち、(6) の場合 (5) とは異なり「自ら」とその被修飾要素である主要部名詞句が隣接していない。言い換えれば、「名詞修飾用法の「自ら」は、その分布において、被修飾要素である主要部名詞句に隣接しなければならない」と一般化できる。これは眞野 (2018) が指摘するように、「再帰代名詞支配」という構造的要因からその位置が厳密に規定されているものと考えられる。[4]

名詞修飾用法に対して、副詞的用法は格助詞が後続せず、また先行詞となる名詞とは独立した位置を占める。つまり、独立した副詞であり、形態統語論的な位置は比較的自由である。

(7) a. 大統領は自ら (*が) 演説した。
b. 所轄の警官たちで、自ら事件をもみ消すことに決めた。

また、次のように、「自ら」は主体の動作様態を表す副詞としての用法を持ち、「自分で」に近い意味を表す（詳細は 2.2 節で考察する）。(8) では「自ら」が主語である「先生」を指すとともに、「腕を抜く」という動作が自らの力で行ったことを含意する。

(8) そこまでやると、先生が自ら腕を抜いた。（中略）水着にいくら伸縮性があっても濡れているとそれが十分に働かなくなることがわかっていたからだ。[5]

さらに別の特徴として、「自ら」と関係を結ぶ名詞句、いわゆる先行詞 (antecedent) となる名詞句は、基本的に主語名詞句に限られる。[6]

---

[4] 本稿では、眞野 (2018) の分析とは異なり、「自ら」と主要部名詞句の関係を同格とは考えず、Siemund (2000) による英語の x-self の分析と同様、付加構造 (adjunction) と考える。
[5] BCCWJ PM21_00719。
[6] 但し、使役文や間接受身文などの複文構造ではこの限りではない。

(9) a. 太郎$_i$は、花子$_j$に 自ら$_{i/*j}$秘密を打ち明けた。
b. 先生$_i$は、家族$_j$を 自ら$_{i/*j}$悲しませた。
c. 次郎$_i$は、犯人$_j$によって 自ら$_{i/*j}$ 殺された。

先行詞の生起が同節内に限られるということは、「自ら」が事態の再帰性に関わる再帰的表現であることを示している。これは「自分で」や「自分から」といった他の再帰代名詞とも共通して見られる特徴である（Kishida (2011), 小薬 (2018), Kogusuri (2019a, b)）。先行詞が主語、つまりガ格名詞句に限定される点で、名詞修飾用法の「自ら」とは対照的な特徴を示す。

ここで、「自ら」の名詞修飾用法と副詞的用法の形式的特徴は、次のようにまとめられる。

| | 名詞修飾用法 | 副詞的用法 |
|---|---|---|
| 生起位置 | 名詞句後続位置 | 動詞句修飾位置 |
| 先行詞との構造的関係 | 隣接する付加位置 | 同節内にある動詞句の付加位置 |
| 後続する格助詞 | ガ・ヲ・ニなどの構造格および無格 | なし |
| 先行詞の文法関係 | 主語・目的語・名詞修飾語 | （同節の）主語 |

**表 2. 「自ら」の名詞修飾用法と副詞的用法の形態統語論的特徴**

### 2.2 意味的特徴

次に、「自ら」の意味的特徴について考察する。まず手元にある辞書をあたってみると、『デジタル大辞泉』では「自ら」について次のような意味を列挙している。

(10) 一.《名》自分。自分自身。二.《代》一人称の人代名詞。多く、身分の高い女性が自分をさしていう。わたくし。三.《副》ほかの人の力に頼らないで自分の力で行うさま。手ずから。自分で。

まず、ここで注目すべき点として、名詞修飾用法について記述がないことが挙げられる。また、副詞の意味として、「自分の力で」や「自分で」と同義であると記されてもいる。一方、『三省堂大辞林 第三版』では副詞としての意味を「自分から積極的に行うさま。自分自身で。」と、若干異なる記述の仕方をしている。すなわち、前者の辞書では、「自力で」を表す手段・様態の意味が、後者では「積極的に」を表す意志性・動作主性の意味が前面に出されていると言えよう。副詞的用法の意味記述として、両者のどちらが妥当であろうか。

以上の辞書における記述を出発点に、以下では、BCCWJ の事例を参照しながら、名詞修飾用法および副詞的用法の意味を検討したい。

---

(i) a. 将軍$_i$は、兵士$_j$を 自ら$_{i/j}$突撃させた。
b. 花子$_i$は、太郎$_j$に 自ら$_{i/*j}$ 秘密を打ち明けられた。

### 2.2.1. 名詞修飾用法の意味機能—焦点接辞としての機能

名詞修飾用法の「自ら」は、修飾対象となる名詞句の直後に生起する。2.1 節で見たように「自ら」の直後にガ格が多く生起するが、次いで格助詞のない無格形式も多く生じる。

(11) 長島さん自らティーバッティングまでして、実戦指導をした。[7]

無格形式が可能であるという事実は、「焦点化辞」あるいは「とりたて（助）詞」との類似性を想起させる。実際トルヒナ (2015) では、「自ら」を含む再帰表現の名詞修飾用法に関して、とりたて詞との比較考察を行っている。彼女は、沼田 (1986, 2009) が提案するとりたて詞の統語的基準を基に「自ら」を考察し、名詞修飾用法の「自ら」がとりたて詞と強い類似性を示し、連続的な性格を持つ要素であると結論づけている。

トルヒナ (2015) はまた、意味的特徴に関してもとりたて詞との類似性を指摘する。彼女は、名詞修飾用法の「自ら」が範列的関係を導入すると述べる。すなわち、「自ら」は被修飾要素である名詞句 X に関して、「他のものではなく、X が」という意味を表し、他者を排して X を際立たせる働きをするとしている（トルヒナ (2015: 24)）。この点において、総記の「が」と意味的に類似している。例えば (5) では、「自ら」によって「当主」以外の参与者が出来事に関与した可能性が排除された解釈が優勢である。しかし、この排他性は語用論的含意であり、例えば「分家の当主だけでなく」という句を追加することも可能である。

これに関連して、トルヒナ (2015) では、この排他性の意味は「自ら」が語彙的に備えている特性と考えているが、一方で (12) のように他者が関与する可能性が排除されない例や、それが「も」によって明示された例もある。[8] 彼女は、(12a) の「自ら」が事態への関与に対する「意外性・異例性」を表すと指摘する。

(12) a. 住民自治とは住民自らが地域の政治と行政に参画し、そこに自らの意思を反映させようとするものです。

b. 私はすべての患者さんが平均的寿命までは存命できるよう、患者さん自らも努力するのが本能であり、神の御心であると信じています。

トルヒナは「自ら」の排他性の意味と意外性の意味を別個の独立した用法と考えている (トルヒナ (2015: 26-27)) が、どのような場合にそれぞれの意味が生じるのか明らかではない。また、そもそも両者が全く別の用法と考えるべきか、疑問も生じる。

これらの疑問に対して、本稿では次のように考える。まず、排他性の意味は「自ら」に帰される語彙的意味ではなく、上述したように語用論的含意であって、必ずしも成り立つ必要はない。「自ら」の本務である意味機能は、「自己と他者の対比」による「自己の強調」であ

[7] BCCWJ OB3X_00198。

[8] (12a): BCCWJ PB43_00295, (12b): BCCWJ LBI4_00042。

り、それが文脈的要因との相互作用で排他的な解釈を生じさせると考える。排他的解釈か意外性の解釈かは、述語の表す事態を引き起こす参与者が一人（先行詞）しか想定できないのか、それ以外にも成り立つ状況が想定できのかという文脈的知識に依拠する。従って、「自ら」の意味を 2 つに分ける必要はないと考える。

そうすると、「自ら」の意味である「自己の強調」とは何かが問題になる。名詞修飾用法の「自ら」の意味を考えるにあたって、König (1991) の "center vs periphery" という考え方が参考になる。König (1991) をはじめ、Siemund (2000)、König and Siemund (2000)、Hole and König (2002) などでは、ドイツ語の selbst / selber や英語の x-self における焦点化辞用法の意味機能を考察し、これらが焦点要素（本稿での「被修飾要素」）を「中心 (center)」的要素として据え、さらにこれを文脈上喚起される「周辺 (periphery)」すなわち他の候補と対比させると分析する。中心と周辺の対比によって喚起される関係として、(13) の (a) から (d) のような条件が提案されている。また、各関係を具体的に示した例を (14) に挙げている。

(13) 名詞修飾用法の強意詞は、中心 X（焦点要素の指示対象）を、同等の資格を持った他の候補である周辺 Y と関係付ける。この条件として、以下の 4 つの条件のうち少なくとも 1 つを満たさなければならない。

a. 現実世界の階層において、X は Y よりも上位に位置づけられる。

b. 特定の状況で、X は Y よりも重要である。

c. （親族関係や部分全体関係など）Y は X に基づいて相対的に同定される。

d. X は意識の主体、観察の中心である（話者指示性）。

(Hole and König (2002: 330), 日本語への翻訳は筆者による)

(14) a. The chancellor *himself* was surprised at the results.

b. Nobody cared about the fans when the fire broke out, but the rock star himself was quickly whisked away.

c. Lucy's sister is more intelligent than Lucy herself.

d. Jemima guessed that Pompey had chivalrous doubts about leaving her in the gaunt building, with only Tiger, now in a highly restless mood, as company. She *herself* had no such fears. (König and Siemund (2000: 46), 強調は筆者)

(14) を日本語にしたものが (15) である。これを見ると、名詞修飾用法の「自ら」が (13) のうち (a)「階層において上位にある」という条件を満たさなければならないことが分かる。これに対して、「自ら」と類似の用法をもつ「X-自身」は、より広い意味機能をもっている。

(15) a. 大臣 {自ら / 自身} がその結果に驚いた。

b. 火事が起こった時、誰もファンのことを気にかけなかったが、そのロックスター {*自ら / 自身} はさっさと逃げ出してしまった。

c.　ルーシーの妹は、ルーシー {*自ら / 自身} よりも賢い。

d.　ジェマイマは、ポンペイウスが自分をその陰鬱な建物に残し、今かなり落ちつかない様子のタイガーだけを連れとして置いていくことを紳士的に心配してくれていると思った。しかし、彼女 {*自ら / 自身} は全く恐れていなかった。

ここで「階層において上位にある」という条件をもう少し明確化したい。(15) では、例えば秘書官や事務官など「大臣の部下」が対比される候補として喚起されるが、大臣はそれらの候補よりも「社会的な階層」において上位にある中心的参与者である。いわゆる「目上の立場」である。このような、階層関係の中心と周辺という規定によって、次の例の非容認性も説明される。

(16) a. ?? 大臣ではなく、秘書官自らがスピーチを行った。

b.　葬式で {喪主 / ??僧侶} 自らがお経を上げた。

スピーチを行うにあたり、本来「大臣」が行う業務であり、その補佐役となる「秘書官」は階層上より下位に位置づけられる。また、葬儀を主催する「喪主」と依頼されて業務を努める「僧侶」では、「喪主」の方が階層的に上位に立つ。「自ら」がこうした階層関係の下位となる要素を修飾しているので、(16) のように容認されない。

しかし、必ずしも静的な「社会的な階層」や「上下関係」が問題となるということはない。中心と周辺の間で喚起される「階層」の内実は、描かれる状況、文脈に依存する。

(17) 学園祭では {??先生 / 学生} 自らが企画した展示会を行った。

「先生」と「学生」とでは、社会通念上前者の方が上位・目上に位置づけられ、本来であれば「自ら」は前者を修飾する場合に容認可能と予測する。それにも関わらず、(17) は「学生」の方が容認性が高い。これは、階層関係が参与者間の静的な上下関係ではなく、文脈が表す状況によって左右される相対的なものであることを示している。つまり、「学園祭」においては学生自身が主役となるのが慣例であり、たとえ教育という現場において社会階層的に先生の方が上位とみなされるとしても、「学園祭」という場では「学生」のほうがより上位に位置づけられるのである。

このように、「現実世界における階層」とはその基準が命題内容に基づいて相対化され、文脈によって階層関係が変化する語用論的なものである。このような一見掴みどころがないと思われる関係性も、「自ら」が焦点化する被修飾要素と文脈から喚起される対立候補が位置づけられる関係、「中心」と「周辺」という概念、そしてそれらを規定する文脈との関係によって包括的に捉えることができる。

以上の考察から、「自ら」の名詞修飾用法の意味は次のようにまとめられる。

(18) 名詞修飾用法の「自ら」は、中心 X（焦点要素の指示対象）を、同等の資格を持った他の候補である周辺 Y と関係付ける。この条件として、文脈上喚起される現実世界の階層において、X は Y よりも上位に位置づけられねばならない。

要するに、「自ら」の被修飾要素は対比される候補と上下関係にあることが文脈上喚起され、かつ被修飾用要素がより上位に来る必要があるということである。(15b-d) の例では、この上下関係が明確ではないため、容認不可と判断される。

### 2.2.2. 副詞的用法の意味機能

名詞修飾用法と同様副詞的用法においても、「自ら」は先行詞を中心的要素、文脈上対比される候補を周辺要素と位置づけると考えられる。しかし副詞的用法の場合には、「副詞」として修飾する述語の意味と深く関与することが予想される。ここでは紙幅の都合上、「自ら」の副詞的用法について、いくつかの特筆すべき特徴について述べるに留める。

2.2 節の冒頭で述べたように、副詞的用法については、辞書による記述で＜手段・様態＞の意味や＜意志性・動作主性＞の意味が指摘されている。確かにこのような解釈が得られる例は数多く存在する (19)。また、Kishida (2011) でも、「自ら」の副詞的用法が主語の意志性を表し、無生物の先行詞は容認されないと述べる。しかし、無生物である「細胞」が先行詞となる例 (20a) や意志的・意図的行為とは解釈できない例 (20b) も存在している。

(19) a. 1 横断的・総合的な学習や、2 児童生徒の興味・関心に基づく学習を通じて、3 自ら課題を見つけ、自ら学び、考え、主体的に判断し問題を解決する資質や能力を育てる。[9]

b. 企業は、自ら積極的に規制することで政府の介入を最小限にできる。[10]

(20) a. 興奮の異常発生は、（中略）刺激伝導系の細胞など本来自ら興奮を発生し得る（自動能を有する）細胞の活動が活発になり過ぎたり…。[11]

b. 「講師のヒント」と「自ら失敗した（間違えた）体験」がひとつになってこそ、気付きを知る自立した子どもに成長していきます。[12]

(20) の非意志的用法は、先行詞が表す参与者に事態の責任があることを含意しており、「自動的に」「自らが原因で」などと言い換えられる意味を表す。

Kogusuri (2019a, b) では、「自分で」にも同様の非意志的用法があることが指摘されており、(10) の辞書の記述に見られるように、「自ら」は概して「自分で」と置き換え可能であ

[9] BCCWJ PB23_00305。
[10] BCCWJ PB36_00056。
[11] BCCWJ PB44_00018。
[12] https://e-jyuku.net/school1333.html (2020 年 4 月 26 日採取)。

る。これは、(19) (20) でも概ね当てはまる。[13] Kogusuri (2019a, b) で主張したように、「自分で」の基本的な用法は、事態が生じることの＜責任＞の所在が先行詞にあることを標示することにある。従って、事態の発生が制御不可能な場合、例えば自発態をとる文や被害受身文は「自分で」が容認されないが、これは「自ら」にも当てはまる。

(21) a. * 太郎には昔のことが {自ら / 自分で} 思い出された。
b. * 山田さんは {自ら / 自分で} 雨に降られた。

また、修飾する述語は、動的事態を表さなければならず、名詞述語文や形容詞述語文は基本的に容認されないことも共通している。

(22) 今日は田中が（{*自ら / *自分で}）議長だ。/ 木下は（{*自ら / *自分で}）忙しい。

しかし、「自ら」の副詞的用法には、名詞述語文で生起する例も少数観察される。

(23) a. 各部門の連携を推進すべき経営幹部や部門長が、自らセクショナリズムの元凶である場合も少なくありません。[14]
b. [エヴァンジェリストの特徴をまとめると] そのもの（「インターネット」とか「ローフード」）が大好きで、自ら利用者であること。[15]
(24) a. ?? …経営幹部や部門長が、自分でセクショナリズムの元凶である場合も…
b. ?? …そのもの（「インターネット」とか「ローフード」）が大好きで、自分で利用者であること。

判断はやや微妙であるが、(23) の「自ら」は (24) のように「自分で」と置き換えにくいと感じる。このことは、「自ら」が「自分で」と異なり静的な事態を表す述語も、ある程度許容することを示している。

従って、両者は意味的に微妙に異なる特徴をもっていると考えられる。

## 3. 結論

本稿では、「自ら」についてその名詞修飾用法と副詞的用法を考察してきた。両者は形態統語論的に異なる振舞いを示し明確に区別できる。意味的特徴に関しては、名詞修飾用法は、先行詞が表す要素が文脈上対比される要素に対して、階層上の上位に位置しなければならず、類似の用法を持つ「自身」よりも狭い意味を表すと主張した。一方、副詞的用法は「自

[13] 但し、筆者の直感では (20a) の「自ら」は「自分で」と置き換えにくく、置き換えられたとしても擬人的解釈が優勢である。これは「自分」がより人間を先行詞として要求するためである。
[14] BCCWJ PB55_00113。
[15] http://rawbeauty.seesaa.net/article/114555355.html (2020 年 4 月 26 日採取)。

分で」に近似した用法を持ち、両者は必ずしも置換可能ではないことも指摘した。今後は「自ら」の 2 用法がもつ意味的特徴について、BCCWJ などのデータを基に、さらに詳細な調査を行う予定である。

## 参考文献


Hole, Daniel and Ekkehard König (2002) Intensifiers and Reflexivity: Eurotype vs. Asiatype. In Kennosuke Ezawa et al. (eds.) *Linguistik Jenseits des Strukturalismus: Akten des II. Ost-West-Kolloquiums für Sprachwissenschaft*, 349-368, Berlin: Narr Dr. Gunter.

Kishida, Maki (2011) *Reflexives in Japanese*. PhD dissertation, University of Maryland.

小薬哲哉 (2018)「「自分」の付加詞用法に関する一考察：「自分から」を例に」『認知・機能言語学研究 III』, 1-10.

Kogusuri, Tetsuya (2019a) On the Emphatic Reflexive in Japanese: With Special Reference to *Zibun-de*. *Ninchi-Kino Gengogaku Kenkyu* (*Cognitive-Functional Linguistic Research*) *IV*, 31-40.

Kogusuri, Tetsuya (2019b) Emphatic Reflexives in Japanese: A Frame-Constructional Approach. The paper read at *International Cognitive Linguistic Society* (ICLC) 15, August, 2019.

König, Ekkehard (1991) *The Meaning of Focus Particles: A Comparative Perspective*. London; New York: Routledge.

König, Ekkehard and Peter Siemund (2000) Intensifiers and Reflexives: A Typological Perspective. In Zygmunt Frajzyngier and Traci S. Curl (eds.) *Reflexives: Forms and Functions,* 41–74. Amsterdam: Benjamins.

眞野美穂 (2018)「日本語同格名詞句についての一考察」福田嘉一郎・建石始（編）『名詞類の文法』21-40, 東京: くろしお出版.

沼田善子 (1986)「第 2 章とりたて詞」『いわゆる日本語助詞の研究』105-225, 東京: 凡人社.

沼田善子 (2009)『現代日本語とりたて詞の研究』東京: ひつじ書房.

Siemund, Peter (2000) *Intensifiers in English and German: A Comparison*, London; New York: Routledge.

トルヒナ・アンナ (2015)「体言後接の再帰表現の意味と統語的特徴」『日本語文法』15(2): 20-36, 東京: くろしお出版.